

「弥山禪定」と「もひとり神事」

福代 宏*

“Misen-Zenjō” and “Mohitori Sinto rite”

by

Hiroshi Fukushiro

はじめに

当館では、平成10年度に特別展「天狗と山伏—修験道の世界—」を開催し、日本人の山岳信仰—修験道の宗教世界を展示紹介した。そのうち鳥取県の修験霊場である大山・三徳山に関しては、有形文化財に加えて祭礼・年中行事を写真パネルや映像資料を用いて紹介した。その中でも、大山で行われている「もひとり神事」は、古来の山岳信仰の形を受け継いでいる興味深い行事である。

大山は中国地方の最高峰(1,711m)であり、『大山寺縁起』によれば養老2年(718)、^{金蓮上人}金蓮上人によって開山されたとされる。同縁起には、役行者の来山伝説も記され、平安・鎌倉時代には修験道場(霊山)としての性格が強まった。江戸時代には、大山寺は、寺領3,000石、山中に42の坊社を数える大寺院となり、坊社は西明院、南光院、中門院の三院谷に分かれ、別に比叡山から派遣された大山座主が西楽院(現在の大神山神社社務所)で一山を統治し、天台宗別格本山として、独自の儀礼や信仰を持っていた。

しかし、明治維新による神仏分離、廃仏棄釈によって大山寺の寺号は廃され、本堂(智明権現社)は大神山神社奥宮となった。これによって、大きな変貌を余儀なくされた大山の祭事の代表的な事例が、「もひとり神事」である。「もひとり神事」は、かつて「弥山禪定」と呼ばれていた行事を神道化したものと考えられ、大山山頂の霊水と薬草を採取する行事である。大山寺は、明治38年(1905)に寺号の復活が許されたが、「もひとり神事」は、現在も大神山神社奥宮の行事として、神官によって執行されている。

大山寺は、明治維新後の廃仏毀釈の時期に多くの寺宝や古記録を流出したといわれ、また昭和3年(1928)の火災によって『大山寺縁起』をはじめとする文化財も失われた。そのため、かつての行事の姿を知ることは困難であるが、本稿では、江戸時代に行われていた「弥山禪定」と、現行の「もひとり神事」の内容を比較し、その継承と変容について検討したい。(注1)

1 江戸時代の弥山禪定

「弥山禪定」に関する最も詳細な史料は、大山寺僧であった^{とうぜん(とうねん)}嗒然〔寛政8年(1796)—文久1

* 鳥取県立博物館学芸員

年(1861)]の著した『大山雑記』である。(注2)すでに沼田頼輔『大山雑考』以来、よく知られた史料であるが、その全文が紹介されたことはないため、やや長文であるが、「弥山禅定」に関する部分の全文を引用する。〔下行()内の書き下し文は筆者による〕

弥峯新登行者兩人。毎歲以五月朔入堂。書写法華各一部。

(弥峯へ新たに登る行者は兩人。毎年5月朔をもって堂に入り、法華經各一部を書写す。)

至六月十四日之夕。与先導者三人同攀弥峯。納經于銅壺。

(6月14日の夕べに至りて、先導者3人とともに弥峯に同攀し、經を銅壺に納め、)

以十五日之朝下。是我山之清規也。呼曰弥山禅定。

(15日の朝をもって下る。これわが山の清規なり。呼んで弥山禅定といふ。)

其不日納經而曰之禅定者蓋有以。稽之傳記。

(その納經といわずして、これ禅定というは、けだしゆえあり。これを伝記に稽するに、)

往古修修驗行者困峯七日而返。其修行入馬頭之秘峯。

(往古修驗の行を修むる者、峯を回り、7日にして帰る。その修行するや、馬頭の秘洞に入り、)

立三鈷之法岩。禅修觀鍊。往々有成悉地者焉。

(三鈷の法岩に立ち、禅修觀鍊す。往々にして悉地をなす者ありや。)

世降雖無其人亦之其餘風也。

(世を降り、その人なしといえども、またこれその余風なり。)

其書写法華曾不用毛錐膠墨。

(それ法華を書写するにかつて毛錐膠墨を用いず、)

以稻草心作筆以赭土為墨。

(稻草心をもって筆を作り、赤土をもって墨となす。)

而取其土秘處楞巖谷底山徒之外無復知之也。

(しかして、その土の秘處、楞巖谷底から取り、山徒の外にまたこれを知る(者)なし。)

而不知其創於何代。

(しかして、何れの代にその創るか知らず。)

十五日即為法華千部會當中日。些會則創于貞觀二年勅願。

(十五日すなはち法華千部会の当中日たり、この会則は貞觀二年勅願に創る。)

綿々業向千年。攀峯清規蓋亦濫觴於斯也歟。

(綿々たる業千年に向かう。攀峯の清規、けだしまたかの濫觴なりや。)

且夫禅定淨侶五人下嶽至本祠之路。有信士女横臥于路。人々成席。

(かつそれ禅定淨侶五人は嶽を下り、本祠に至るの路。信士女あり。路に横臥し、人々席をなす。)

恰若舟浮梁。皆懇請踏。咒其各有痼疾之所。

(あたかも舟の浮橋がごとし。みなおのおのが痼疾(=持病)あるところを踏(む)呪(い)を懇請す。) 乃無_二頭面_一無_二背腹腕脾_一取次踏_二過之_一。莫_レ不_レ有_二効驗_一云。

(すなはち頭面となく背腹、腕脾となく取次てこれを踏み過ぐ。効驗あらざるなしという。)

又採_二絶巔草木_一来以擲_二与於人海_一。其競_レ獲_レ之。而相蹂躪乱噪。

(また絶巔(=山頂)の草木を採り来て、人海に擲与す。これを取り競う。あい蹂躪し乱噪す。)

一時為_レ之動_二地天_一矣。其草有_二香芥芳蘭異麥_一。其木有_二靈梅_一。

(一時これをなさば地天動ず。その草に香芥芳蘭異麥あり。その木に靈梅あり。)

皆非_二人間物_一。獲_レ之与_二之病者_一皆愈。最禳_二瘧疾_一如_レ掃云。

(みな人間の物にあらず。これを獲り病者に与えば、最も瘧疾を祓う。掃くがごとしという。)

又取_二銅壺下底_一經之為_レ土者_一而還。山徒常以為_二除疾符_一也。

(また銅壺下底で経の土となるを取りて還る。山徒は常に、もって除疾の符となす。)

夫神州大嶽以_二富士_一為_二其最大_一。而至_二吾嶽_一則居_二其第四_一。

(それ神州の大嶽は富士をもつてその最大となしてわが嶽に至りては、すなはちその第四に居す。)

隨可_レ知_二其第一二三嶽之靈_一高神_三秀於吾_一也。

(したがって、その第一二三嶽の、吾より靈高にて神秀なるを知るべし。)

而咸許_レ攀_二絶巔_一。雖_二凡俗_一不_レ禁也。

(しかして、みな絶巔に攀づるを許す。凡俗といえども禁ぜざるなり。)

唯如_二吾嶽_一會不_レ許_レ之。但許_二禪定淨侶之歲一攀_二耳_一。

(ただ吾が嶽のごとき会はこれを許さず。ただ禪定淨侶の年一攀を許すのみ。)

世有_二倨慢狡黠者_一。猜_二其不_レ許_レ之自以為_レ歪_一欺凡庸_一。

(世に倨慢狡黠なる者あり。それこの許さざるをそねみ、みずからもつて凡庸を歪欺なす。)

而有_二私姦登者_一。其或未_レ到_二半嶽_一而斃。

(しかして私姦し登る者あり。それあるいはいまだ半嶽に到らずしてたおる。)

或下而后失_レ明。或發_二風狂_一。或感_二惡疾_一。

(あるいは下りて後、明を失う。あるいは風狂を發す。あるいは惡疾を感ず。)

其如_レ是誤_レ身自_レ古其證不_レ為_レ不_レ多矣。

(そのかくのごとく身を誤り、古よりその証し多からずなさざる。)

以_二予所_一聞知_二其為_レ之者多是達磨門之慢僧_一。六十六部之獯徒。衒法之道士。

(予の聞き知るところでは、こをなす者は、多く達磨門の慢僧、六十六部の獯徒、衒法の道士、)

賣怪之廟祝也。咸為_二嶽靈_一所_レ中也。

(売怪の廟祝(=廟社で香火を司る宗教者)なり。みな嶽靈のなすにあたる所なり。)

豈可_レ不_レ禁乎。

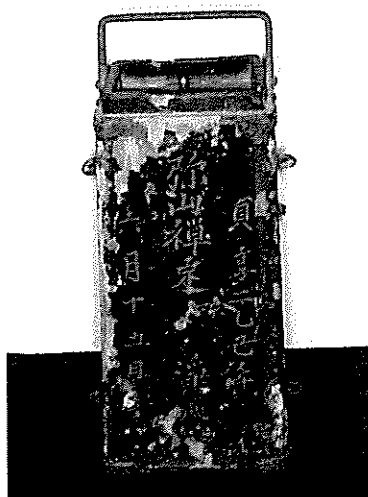
(あに禁ぜざるべけんや。)

『大山雑記』によれば、「弥山禅定」は法華経書写の行を積んで潔斎した行者2名が、6月14日の夕べに先導者3名と共に弥山（大山山頂）に登り、経典を銅壺に納め、翌15日朝下山する行事である。この行事を「禅定」（注3）と称するのは、かつては修験行者が7日間の山林抖擞を行う修行であったことに由来するというが、嗒然の時代、すなわち幕末には、そのような修行を実際に行う者はなくなっている。回峰行が写経と納経という姿へ変化した理由は示されていないが、写経の際には毛筆や膠墨、すなわち獣から得られる物を一切避け、筆は「稲草心」墨は「赭土」を用いる。これは獣の不浄性を忌避する仏教的な理由によると考えられるが、赤土を「楞巖」（注4）から取ることに、修験の行としての性格が見られる。

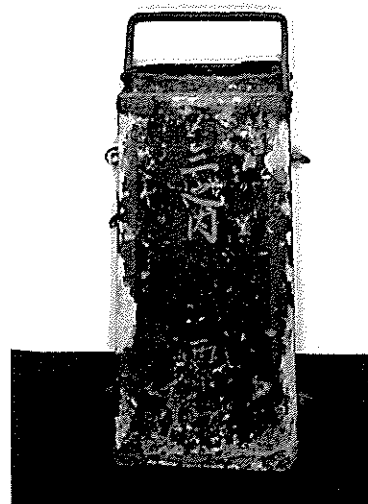
5名の下山時には、信者が集まり、「踏呪」を懇請する。これと同様の姿は、大峰山参りの行者を描いた「役行者御傳記図絵」（注5）に見られる。この絵に付けられた説明には、「夏悩の呪を頼ますると子をいだせば、御山を踏しこのわらんず、他行の足とはかくべつなり、戴かさんと先達は此方の女子も、向ひ



の男子もまだ幼きは乳母ともにまたいでこそは通りける。是ぞ行者の功德なるべし」とあり、「御山を踏みしこのわらんじ」に特別な意味を認めている。「弥山禅定」での「踏呪」も霊峰大山を踏破したことによる霊性を持つと考えられる。また、5名が持ち帰る草木や土と化した経典は、靈験を持つ物として信者に与えられる。ここでは山頂から持ち帰る「浄水」についての記述はないが、『大山西樂院年中行事』（注6）「山上より齋せる水、并、草」とあり、現在の「もひとり神事」の中心となっている水を汲む行為もなされていたことは確実である。また、米子市立山陰歴史館には弥山禅定に用いられた浄水器（注7）が所蔵されており、そのことを裏付ける。



表面



裏面

なお、浄水器については、沼田頼輔『大山雑考』の「彌山禅定」の項に、「登山の際齋らしたる

別圖の如き阿伽桶（この桶今洞明院に所藏す）に池中の水を満て、とある。洞明院が所藏するとされた阿伽桶は、昭和3年の火災のためか、現在所在が確認できず、また刊行された『大山雑考』には、阿伽桶の図版は掲載されていない。したがって、現在確認できるものはこの1点のみである。しかし銘文から、同様の浄水器（阿伽桶）は3点存在するはずであり、これは「弥山禪定」の先導者の人数と同じである。先導者がそれぞれ浄水器を持って登山していたことが推測できる。

以上のように、江戸時代における「弥山禪定」は、修験道的色彩を強く残した行事であった。

2 現行の「もひとり神事」

霊峰大山は、明治維新による神仏分離・廃仏毀釈を迎え、禁足が緩んでいく。明治時代には、植物研究や測量に限られた登山であったが（注8）、大正時代になると、レクリエーションとしての夏山登山ブームを迎える。正面登山道（現在は登山禁止の溝口町榎水から登るコース）に次いで夏山登山道が整備され、大山は登山者に開放されるのである。おそらく明治期に「弥山禪定」は大神山神社が執り行う「もひとり神事」に神事化したと推測できるが、詳細な時期は不明である。そしてさらに大正期には夏山開きの性格を有するようになったと考えるのが妥当であろう。

写真は大山の「山開きと登山者」を撮影したもの（『改訂版日本地理風俗大系中国・四国・瀬戸内海』1935 掲載）で、「夏の山開きになれば諸國より雲集する登山者で山頂は時ならぬ賑ひを呈する。圖は頂上室堂附近における登山者の群れ。」と説明がつく。おそらく大正年間か昭和初期の「もひとり神事」の風景であり、白衣に蓑笠をつけた百数人の登山者の姿が確認できる。



現在も大神山神社では、「大山古式祭もひとり神事」と称して、毎年7月14日の夕方から翌15日の朝にかけて、執行されている。この神事には、大神山神社本社（米子市尾高）宮司をはじめ米子市・会見町・大山町といった近隣市町村の神官数名と、毎年神事に参加する先達2名（注9）、大山の牛馬守護や病氣平癒の御加護を受けようとする一般信者が参列する。筆者は、実際に平成9年7月14日のもひとり神事に参加したので、以下に行事の次第を記す。掲載した写真も同日に撮影したものである。

なお「もひとり」の「もひ（埵）」とは、水などを入れる食器のことで、転じて飲料水を表し、「もひとり（主水・水取）」全体で飲料水を掌ることを表す。

14日（前夜祭）

午後7時、大神山神社奥宮で、参列者全体の結団式を兼ねたお祓いが、前夜祭と称して執り行われる。（写真1）当日、集まった一般信者は、鳥取県東伯町民、米子市民、岡山県新見市民、哲多町民、哲西町民の約20名であった。このうち、岡山県からは牛を飼っている農家が、毎年「もひ

とり神事」に団体で参拝している。さらにこの年は、地元大山寺在住（旅館業者）の女性会が新たに参加した。

前夜祭の祭典が終了すると、一般信者は持参した折詰を広げ、神官も交えて懇親の宴が開かれる。その後、神官は控室で休み、一般信者は神社から毛布を借り、仮眠を取って夜中から始まる神事に備える。

15日（もひとり神事当日）

午前1時全員起床。午前1時半過ぎ、参列者は再び神前で神官によるお祓いを受ける。神官の中から正使（山頂での神事を主に執行する者）・副使（正使を補佐する者）が1名ずつ選ばれ（注10）、先達1名、一般信者から選ばれた屈強な者「強力」（霊水の桶、薬草の採取道具、食糧などの運搬役）数名と共に、白衣に鉢巻、脚絆、白装束に身を包んで神前に並ぶ。続けて登山直前には本殿左手の境内で、留守役の神官によって、熱湯を笹の葉でかけられる湯立て式の「派遣祭」（写真2）を受ける。「派遣祭」が終了した午前2時半過ぎ、一行は暗い闇の中を山頂へ向けて出発する。一方、登山に参加しない留守役の神官・先達1名・一般信者は拜殿でお籠もりを続ける。

登山路は、大神山神社右手奥から登り始める。正使・先達・強力・一般信者・副使という順で隊列を組み、元谷小屋下方の大堰堤を渡り、北尾根コースを取って六合目避難小屋下方で夏山登山道に合流する。平成9年の登山は、霧のような雨の降る、あいにくの天候であったが（写真3）、天候の良い年は、御来光を拝んで登るといふ。

午前4時過ぎに山頂下の「石室」と呼ばれる祭場に到着。（写真4）石室とは、大正10年（1921）に建てられた人工の避難用の洞穴であり、現在、山上宮として神事の場所となっている。ここで肩衣に烏帽



写真1



写真2

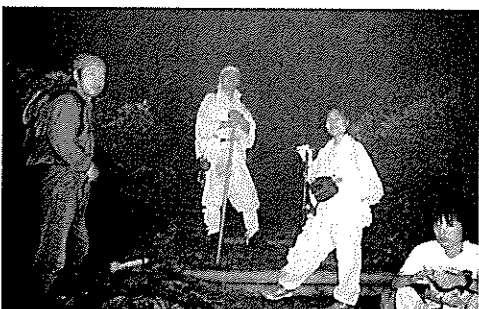


写真3



写真4



写真5

子を付け、草鞋に履き替えた正使・副使は、石室の中で、神饌を捧げて神祭を執り行い、続けて登山者全員が玉串を奉奠する。

その後、「もひとり」が行われる。

まず、石室前の草原中にある「梵字ヶ池（地藏ヶ池）」という小さな池の前で、正使が鈴を振りながら祝詞を奏上する。（写真5）

次に、正使は、強力が神社から運んできた水桶に入っていたお神酒を池に注ぎ、空いた水桶に梵字ヶ池の霊水を汲む。（写真6）

一方で先達が中心となり、強力とともにヒトツバヨモギ（注II）を鎌で刈り取る。（写真7）

霊水とヒトツバヨモギの採取が終わると、山頂での神事は終わりである。時刻は午前5時を回り、登山した全員が、石室の中で、強力の運んでおむすびを食し、一息ついた後、荷物をまとめて下山する。

下山途中、大神山神社奥宮に近づいた時点で、若い強力一人が先行し、あらかじめ迎えに出ていた留守役の先達に下山を伝える。この先達は、続いて神社で待つ神官と一般信者に報告し、一行が奥宮に到着するときに、出迎える。（写真8）

一行は奥宮正面で整列し、正使が宮司へ無事に神事が終了したことを報告し、霊水と薬草を引き渡す。

留守役の神官は、持ち帰られた霊水と薬草を神前に供え、神前で報告し、祭典が執り行われる。この報告の祭典終了後、霊水と薬草が参加した一般信者に分け与えられる。（写真9）



写真6

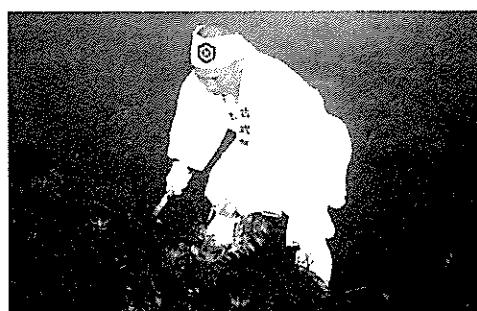


写真7



写真8



写真9

3 両行事の比較

「弥山禪定」は6月14日夕から6月15日朝にかけて（旧暦）の行事であり、「もひとり神事」では7月14日夕から7月15日朝にかけて執行されている。これは、単に月遅れであり、祭日を踏襲しているといえる。ただし、「弥山禪定」には写経が伴うので、その期間を含めれば、5月朔日（旧暦）から始まることになる。

「弥山禪定」は兩人の当番と先導者3人の計5人によって行われたが、「もひとり神事」は正使・副使・先達と一般信者によって執行される。当番の僧侶2名が正使・副使と称される神官2人に変わり、先導者は「先達」と称されるようになり、僧侶が民間人へと変化し担うようになった。さらに、「もひとり神事」では、霊水と薬草をはじめとする荷を運ぶ強力という役が設けられ、一般信者が行事に参加している。

「弥山禪定」とで中心作法であった写経・納経は、「もひとり神事」で廃されたため、土となった経典を呪符とすることはなくなった。これに対し、禪定行者による「踏呪」は昭和50年代の野津龍氏の調査によれば、神官が履いた草鞋に関するまじないに変容していた。(注12)そして、今回の筆者の調査では、神社の発行する安産御守に草鞋を割いて入れるという形態で残っていた。ただし薬草と霊水の配布は、現在でも「もひとり神事」の中でも引き継がれている。

おわりに

本来の「弥山禪定」は大山山中における7日間の山林抖擻を指していた。江戸時代には、「楞巖禪定」や写経・納経が中心となったが、庶民の現世利益に応えるため、禪定行者による「踏呪」や薬草・霊水の配布等の修験道的要素が見られる。

明治維新による神仏分離・廃仏毀釈を迎え、「弥山禪定」は本来副次的であった霊水と薬草の採取を主要な作法として「もひとり神事」に形を変えながらも存続した。さらに大山の禁足を取り締まることを、世情の流れから無駄と判断し、夏山開きの神事に民間の参加を許したのではなかろうか。

昭和11年国立公園に指定された(昭和38年には「大山隠岐国立公園」と名称変更)大山は、数回国体の登山競技の会場ともなり、毎年多くの登山客が訪れる。現在大山では、毎年6月の第一土・日曜日、「もひとり神事」に先行して夏山開きの祭が行われている。これは、大神神社の神官と地元の観光・山岳関係者によって登山の安全を祈願して行われるもので、新しい行事であるが、夏山の観光シーズンの幕開けにふさわしく多くの人で賑わっている。一方で、毎年「もひとり神事」に参加する信者があるように、大山の霊力を求める修験道由来の信仰は続いているのである。

(注1)「弥山禪定」や「もひとり神事」に関する文献は、以下のものがある。

- 『大山雑考』1903 沼田頼輔 「松陽新報」へ連載(1961 復刻 稲葉書房)
- 『大山口碑伝説』1934 木山愛精(『日本の名山〇19大山』1998 博品社 所収)
- 『大山』1959 毎日新聞社
- 『大山史話』1966 下村章雄 稲葉書房
- 『大山・石鎚と西国修験道』1979 宮家準編集 名著出版
- 『生きている民俗探訪』1982 野津龍 第一法規
- 『山の宗教—修験道講義—』1991 五来重 角川選書
- 『大山—その自然と歴史—』1992 山陽新聞社

(注2) 米子市立図書館には『大山雑記』の写本が2冊所蔵されており、1冊は愛知県西尾市立図書館岩瀬文庫の明治36年田中景 榮の写しであり、他方は佐々木一雄氏旧蔵本で、明治24年の足立正写本を大正2年に写したものである。2冊とも「弘化三（1846）年丙午夏五月 山陰角盤山大山寺 西溪円流院 嗒然誌」とある。

(注3) 「禪定」とは、本来、悟りの境地に達して仏と一体化する仏道修行のことであるが、修験道においては「禪頂」とも表記され、霊山の頂上で修行することを意味する。

(注4) 「楞巖」は、修禪・耳根円通などについて禅法の要義を説いた「首楞嚴経」由来の言葉。『大山雑考』には「楮土を取ることは、これを楞巖禪定と稱し」と記述されている。

(注5) 嘉永3年（1850）藤東海作、浦川公左衛門による役行者の絵物語。文・絵とも1976年の山伏保存会の復刻本を引用した。

(注6) 『大山西樂院年中行事』は、大山寺全体の年中行事の記録。『大山雑記』同様に愛知県西尾市立図書館岩瀬文庫の写本を米子市立図書館所蔵。『大山雑考』に抄訳あり。

(注7) 法量は160×220×400mm。木製漆塗り。ほぼ四角柱状の箱であるが、底部が口よりやや広く、側面は台形状を呈している。上下面の四隅を鉄片で強化してある。背負子に固定するためか、両側面に2カ所ずつ計4個の環状の鉄具が付いている。上面には注ぎ口らしき金銅製の筒と可動式の取っ手がつく。朱泥で書かれた銘が、(表)「貞享二乙丑年 弥山禪定淨水器 六月十五日」、(裏)「三之内 西樂院」とある。

(注8) 『大山—その自然と歴史—』の「登山の足跡」には明治・大正時代の登山史が詳しく記載されている。

(注9) 修験道では、他の修行者を導くこと（人）、峰入りの時に、同行の修験者の先導となる熟達した山伏を指す。先達に関しては「泊村の蒲田、三朝町の村上両家の人にかぎられているようだ。」（『大山』）と記述されているが、近年は、泊村の伊藤氏、三朝町の村上氏の2人が務めている。山頂に登り薬草を採取する役の伊藤氏は、永年「もひとり神事」に携わったことから現在先達を務めるようになったという。

(注10) 実際には、若手の神官が4～5年毎に交代して務めている。

(注11) 「ダイセンヨモギ」とも呼ばれるキク科の多年草。本州中部以北と大山付近の山地に生える。高さ〇・六～一メートル。茎から長楕円形の葉が1枚ずつ生えている。

(注12) 野津龍氏による調査では「登山した神官のワラジの藁紐が安産のお守りになる。妊婦の腹帯の間に入れておくと、安産間違いなしといわれている。」のは「聖なる山伯耆大山の山頂を踏みしめたワラジであったからだ。」と「踏呪」の変容を指摘され、さらに薬草と霊水に関しては「牛に食べさせ、乾燥させて人間の飲むせんじ薬にしたり、先述の霊水で処理して大山モグサを製する。」「飲めば万病に効き、振りかければ寿命長延になるといわれ、神社ではこれを靨の水にして護符を書いている。牛が下痢をしたときに、この霊水を盃一杯飲ませると、たちどころに治るともいう。」と報告されている。

(終わりにになりましたが、この調査に際して、大神山神社宮司の相見行佳氏、大山寺の藤谷実道氏、同じく大館宏雄氏に様々な御教示を賜りました。深くお礼申し上げます。ありがとうございました。)